

棚田学会通信

第8号 2002年11月2日

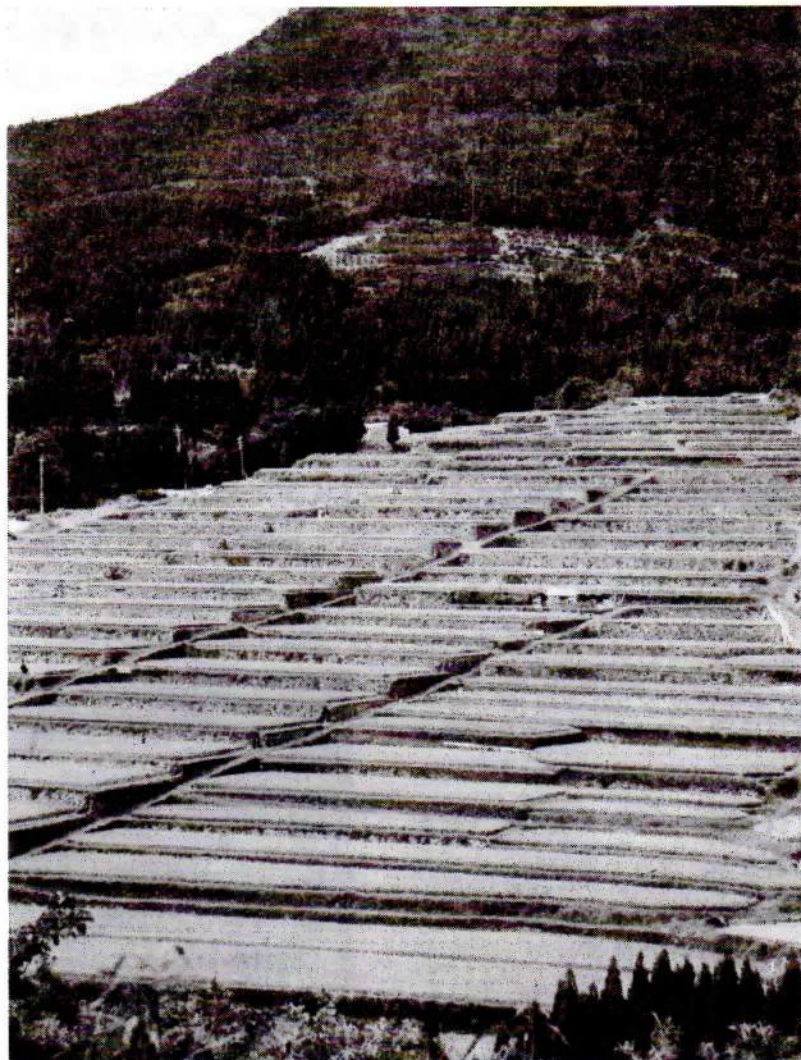
発行/棚田学会

〒184-8577

東京都小金井市本町6-5-3
(ふるさときやらぼん内)

TEL:042-381-6721

FAX:042-383-8614



目次

表紙の写真・宮崎県日南市坂元地区の棚田

会長挨拶

先祖はなぜ心が美しかったのか……………東京大学名誉教授・木村尚三郎…1

巻頭言

“崩食の時代”の棚田の活用法……………宮崎県日南市長・北川昌典…2

各地の情報

棚田と都市、保全と共生の幕開く～大収穫、全国棚田サミット鴨川大会を開く

東京都江戸川区在住(大山千枚田親睦会世話人)・伊東春海…2

埼玉最大「寺坂の棚田」の保存活動……………埼玉大学、立正大学非常勤講師・吉川國男…3

再考「棚田地域」の整備について……………山形県農林水産部農村計画課・高橋信博…4

星野村の棚田調査・シンポジウムに参加して……………国立歴史民俗博物館友の会事務局長・河合 享…5

日本の棚田百選紹介

“畦に咲く真っ赤な彼岸花が美しい” 檜原の棚田……………上勝町棚田を考える会・中村由信…6

事務局からのお知らせ

[会長挨拶]

先祖はなぜ心が美しかったのか

棚田学会会長 木村尚三郎
(東京大学名誉教授)

石井進前会長が急逝され、はからずも会長に推されてしまいました。とても前会長の代りは勤まりませんが、日本の農村と農業には私なりに関心を抱いてまいりました。

旧国土庁が、昭和 61 年 (1986) から始めた農村アメニティコンクールで、審査員の 1 人として国内各地の中山間地域を訪ねたのも、その理由の一つです。あるいは、平成 9 年 (1997) から 11 年かけて、「食料・農業・農村基本問題調査会」(首相直属) の会長を仰せつかったことにもよっています。

しかし私には、30 年来の疑問がありました。専門のフランス近代史の関係から、フランスの田舎を訪ねる機会が多いのですが、そのたびに抱く疑問です。

— どうしてこちらの農村はどこも美しいのに、戦後日本の農村は汚くなってしまったのだろう。戦前ないし明治以前の農民たちは貧しかったはずなのに、今に残る棚田のような美しい景観をつくり出せたのだろうか。どうして先祖は美意識を持ち、今の私たちよりもっともっと心が美しかったのか —。

棚田に映る美しい「田毎の月」は、すでに江戸初期の「藻塩草」(寛文 9、1669 年) に述べられています。

「信州更級(さらしな、級=科)の田毎の月は、姥捨山(冠着山、1252 メートル)上より見下ろせば、田毎に月ありて風景斜めならず」。

姥捨山伝説からも明らかのように、棚田のあるところは、かつて大変に貧しい地域だったはずで

す。私たちの先祖は食べる米がないという厳しい現実から、飢えにつき動かされて、山の棚田を一枚一枚耕していった。にもかかわらず美しい棚田の風景が生まれ、ことに秋、稲を刈り終わったあと棚田に水を引くと、その一つひとつに月が映って、美しさが万人の心にしみわたる。これはいったい何だったのでしょうか。

それは、自分たちの“いのち”がかかっていたからではないのでしょうか。“いのち”がかかっていたらこそ、厳しい大自然の声に素直に従わなくてはならない。大自然との真剣なかかわりこそが、人を芸術家にし、心を打つ美しさの源をつくり出す。反対に、戦後日本の農村を汚くしてしまったのは、人間の“いのち”の糧であるべき農産物に、カネしか見なくなった経済合理主義のせいだったのでないのでしょうか。

大型機械の入らない棚田での作業は、過去にさかのぼるほど、どんなに過酷な重労働だったか、と私たちは思います。しかし島根県柿木村教育委員会が本年 3 月に出した優れた報告書『大井谷の棚田』を読むと、「その苦労はなかった」と当事者たちが屈託なく笑っているのに、心を打たれます。それはまさにわが子を育てるのと同じく、“いのち”を耕し、自らの手ではぐくみ育てていたからに違いありません。

棚田文化の掘り起こし、保全と創造を通し、21 世紀のキーワードを“いのち”といたしたく存じます。会員の皆様方によるお教えと御支援を、切にお願い申し上げます。

(2002 年 9 月 30 日記)

[巻頭言]

“崩食の時代”の棚田の活用法

日南市長・北川 昌典

□概要□

日南市は県庁所在地の宮崎市からエメラルドグリーン^①の海岸線を南に1時間ほど車を走らせたところにあります。

日南市は海と山林に囲まれた田園地帯として豊富な地域資源に恵まれ、農林水産業を中心に発展してきました。今回紹介します坂元棚田は、昭和3年から10年にかけて開墾され、棚田の周りには当市の特産である飴肥杉が優しく棚田を包み込んでおります。長方形(1枚当たり5畝)に区画された田んぼは階段状に整然と並び、近代的なイメージを持っていますが、その石積みは、石を大きめに割り、試行錯誤を繰り返して積み上げた人々の苦労が感じられる温か味を持った棚田であります。

□棚田オーナー制度□

しかしながら、坂元地区は過疎と高齢化が進み、耕作放棄地や荒れ地が見られるようになっておりました。このため、国の事業を導入した棚田の整備を契機に、棚田という地域資源を保全しようという地区住民の気運が高まり、保全の取り組みはもちろん、春にはレンゲ、秋には曼珠沙華で棚田を彩り、訪れる人々が楽しんでいただく取り組みがなされております。また担い手解消策として、都市住民のボランティアによる田植えや稲刈り、

石垣清掃の農作業支援活動を企画し、このことが結果として、農業や棚田保全の理解につながり、平成14年度からの棚田オーナー制度の導入へと展開が広がってまいりました。

現在、オーナー制度には20組の方々が参加され、年間3回の農作業や収穫物の送付のほかに、自然や農家と接する機会を多く取り入れ、「農の素晴らしさ」と「農家の知恵」を伝えることにも重点をおいて活動しており好評を得ております。

□崩食の時代□

以前、食の形態は豊食→飽食→呆食、そして現在は崩食の時代へと移り変わったとのコメントがありました。新聞では連日のように、BSE(狂牛病)、偽装表示、残留農薬、日本食離れと様々な問題が取り上げられ、まさに食の崩壊の時代であると痛感しておりまして、日本人が日本固有の大切な自然、文化までも失われつつあるのでは、と危惧するものであります。

現在の農業は、生産者と消費者で支えております。崩食の時代となり「食」に対する両者の接点が希薄となった今だからこそ、私は「食」の再構築に向かって食糧・農業・農村を消費者とともに考える交流の場として「坂元棚田」を位置づけており、将来にわたり棚田を守る活動を支援していきたいと考えております。

[各地の情報]

棚田と都市、保全と共生の幕開く～大収穫、全国棚田サミット鴨川大会

東京都江戸川区在住 伊東 春海 (大山千枚田親睦会世話人)

2002年第8回全国棚田(千枚田)サミットが8月30日から9月1日の3日間、千葉県鴨川市で開かれた。棚田学会からは、中島峰広副会長らが出席。東京に一番近い棚田、大山千枚田の特徴を生かし、「棚田と都市、保全と共生」をテーマに展開。太平洋を望む鴨川グランドホテルと千葉県一高い愛宕山に抱かれた大山千枚田を主会場に開催。今回の特徴は、堂本暁子千葉県知事の記念講演「田んぼは生物多様性の宝庫」と、10の分科会の開催、大学生による「棚田環境大学」の開校であろう。

初日の全国棚田(千枚田)連絡協議会・首長等会議は6議案が承認、可決された。共同宣言では「棚田の幅広い保全活動の展開、中山間地域の更

なる活性、農業や自然を通じて子供たちが新しい世界の発見に注目し、地球にやさしい農業社会の維持に邁進、棚田と都市が共生できる社会の実現に努力」と謳いあげて採択。平成16年の開催地は佐賀県相知町に決定した。

開会式に続く堂本千葉県知事の講演内容は、田んぼの持つ生物多様性について述べた後、「日本人は自然の環境とうまく調和させて文化にしている民族であり、生物多様性条約や植物連鎖の重要性を認識して、人間の都合だけでなく、生物全体を考えた生き方が大切」と述べ、さらに大山千枚田の保全は支援者に定年退職者を巻き込むことで解決し、地元の子供たちの「誇り」になるようにしたい、と結んだ。

続く事例発表は、大山千枚田保存会・石田三示氏の「大山千枚田の保全」、徳島県池田町農林事務所、川崎陽通氏の「上勝町八重地のほ場整備」、福岡県浮羽町の滝内宏治氏の「浮羽町棚田米の販売」など体験を踏まえての発表だった。

夜の全体交流会は 500 名を超え、情報交換が活発に行われた。

2 日目の分科会は、オーナー制度の運営と棚田（中島峰広）、地域づくりと棚田（千賀裕太郎）、米流通と棚田米（吉田俊幸）、環境教育と棚田（小泉武栄）、生物多様性と棚田保全（水谷正一）、ボランティアと棚田（岸 康彦）、棚田のほ場整備（木村和弘）、「田舎ぐらし」の現実と課題（高野 孟）、棚田景観の保全と活用（麻生 恵）、日本農業の再生と棚田（宇根 豊）の 10 テーマで、40 名から 100 名が各分科会に分かれて参加、3 時間にわたる熱のこもった討論をへて発表した。棚田保全情報の共有化の促進と次期開催地への論点引継ぎなど、有意義な分科会であった。

最終日の棚田環境大学は若い人たちが大学の枠を超えて、農業について真剣に勉強し、議論しあったという意味で大きな収穫。同時進行のステー



東京に一番近い棚田でサミット開催

ジイベントも盛り上がりを見せ、全員輪になっての参加「お米さんありがとう音頭」で終了した。

参加述べ人員は 3000 人を超え、遠くは四国、九州地方からも馳せ参じた。地元からオーナー制度の拡大を望む声が出るなど、参加者がともに満足できる、大成功のサミットであったといえよう。この成果を踏まえて、今後の棚田保全にどう具体的に結びつけていくか、が課題であり、いわば棚田保全の実質的なスタートのサミットであったといえる。

埼玉最大「寺坂の棚田」の保存活動

埼玉大学、立正大学非常勤講師 吉川 國男

寺坂の棚田は、秩父盆地の東縁、高篠山の西麓斜面に広がっている。行政的には、埼玉県秩父郡横瀬町苧米地区。水系的には荒川の支流・横瀬川の右岸側斜面にあり、関ノ入谷の出口に立地する。標高は 240m から 290m の範囲にあり、全体の規模は、最盛期の昭和 30 年代には 5ha、350 枚とも数えたと伝えられるが、現在はその一部が畑、林地、宅地化され、面積・田数は不詳である。築



寺坂の棚田で草取りをする棚田学校のメンバー

成年代についても、今のところはっきり分らないが、平安時代にはすでに在住していたと推察される。今後の考古学的な調査の成果が望まれる。

この棚田にも危機が訪れた。各地の棚田が直面したように、農業従事者の高齢化や機械化作業の不適なことから、耕作放棄や地目変換がすすみ、往時の見事な棚田景観が次第に損なわれていった。そのような状況の中、大区画田んぼへの改変事業が昭和 55 年と平成 10 年に計画された。しかし、地元有志や筆者らの新聞による棚田保存の重要性の訴え、町議会の保存要望も加わり、同計画は中止された。中止の代替策として町当局と地元農家は、平成 13 年度から棚田の保存と活用事業を推進することになった。保存事業としては、農水省の補助金を得ての段畦の補修、遊歩道の整備があり、活用事業では花園づくりとユニークな「寺坂棚田学校」がある。

この棚田学校の目的は、都市住民との交流を通して、体験学習の機会を提供することにある。学校の授業陣は、農家の方 30 人が当たり、校長は農業委員でもある中隆義氏。この学校を支援するのは、地

元の区長会、婦人会、スポーツ団体などで構成する「苧米を考える会」や高齢者事業団である。

カリキュラムは、田起し、水引き、田植え、田の草取り、稲刈り、脱穀、収穫祭などがあって、その都度、受講生は棚田にやってくる。作付けは、もち米、黒米などで、栽培に当たっては低農薬、

無除草剤で、機械力と人力の併用で行う。耕作田は、今年度7枚、約2000平方メートルであるが、今後の課題としては3.5haある棚田にどのようにこの方式を広めるかである。筆者や野外調査研究所では、魚介類や水生昆虫類が共生できる棚田活用のモデルを提案しながら協力している。

再考「棚田地域」の整備について

山形県農林水産部農村計画課 高橋 信博

東北山形といえば、きっと棚田も多いのでは？と思われがちですが、実際のところ、山形県の棚田面積は県全体でも5,000ha程度で、大半が県南中山間地域に集中しています。その大部分が傾斜の緩い棚田で、急傾斜地とされる勾配1/6以上の棚田は、全体棚田面積の4%に過ぎません。

この理由として、県全体の水田面積が大きいことが上げられますが、「果樹王国やまがた」に象徴されるとおり、急傾斜地は昔からブドウをはじめとする樹園地として利用されてきたことも大きな理由になっています。市町村ごとに見た場合、棚田含有上位3市町が500ha程度の棚田を持ち、県都山形市にあっても、約300haを有しています。

新幹線で山形に来県された方がまず目にする風景は、置賜盆地の田園風景です。福島から米沢までの峠を超え、急に目前に水田地帯が広がります。東に奥羽山脈、西に朝日連峰に挟まれ、この水田地帯の「どまんなか」を走る山形新幹線。ここから山裾に向かって、なだらかな棚田地帯がつながっています。その棚田上部には、ブドウの棚です。こんな風景が、米沢から山形新幹線の最終地点の新庄まで約100kmずっと追いかけてきます。

さて、山形県の全国棚田100選に認定されているのは、朝日町権平（くぬぎだいら）、山辺町大蔵（おおわらび）、大蔵村四ヶ村（しかむら）の3か所です。全国棚田100選に選ばれたということは、中山間地域で営農している農家にとっては、何よりの励ましになったことは言うまでもありませんが、それ以上にそこで生活する住民や行政が、地域を見直すきっかけとなってくれたことが、大きな収穫になりました。

この認定を契機に、棚田のオーナー制度への取り組みや農作業体験を中心とした地区全体でのイベントの開催・都市住民との交流に発展しています。最近ではさまざまな場面で、行政のバックアップもあり、明るい話題の少ない昨今において、棚田を中心にした元気な地域づくりがはじまっています。

山辺町大蔵の場合、実際に棚田百選の認定を受けたのは面積3.4haの区域でしたが、町独自で隣



日本棚田百選に選ばれた山辺町大蔵の棚田

接した棚田13haを追加し、16.4haを一体的に棚田として保全する区域に指定しました。地区が中心となり、棚田景観維持推進委員会が組織され、保全活動に取り組んでいます。地区全体で杭掛け乾燥（杭掛けに対して町が補助しています）を行ったり、写真コンテストの開催や、棚田への行灯（あんどん）設置なども実施しています。

山形県のほ場整備率は70%と高く、平野部においては約90%程度まで整備されています。米の価格が低迷する中、今まで目が向いていなかった中山間地の純棚田地帯の農家から、生産基盤の整備要望が多くなっています。今後、これらの棚田風景や機能をいかに残しながら整備していくのか？ 私たちに与えられた大きな課題です。

耕作放棄の問題、担い手の問題、工事費負担の問題、事業に対する効果の問題など、どれをとっても問題だらけです。今ほんとうに必要なことは何かを、住民（農家・非農家）と行政がとことん話し合い、その責務を誰かに押し付けるのではなく、役割分担を明確にして、お互いが責任を持ちながら取り組んでいかなければ“成功”はあり得

ないと考えます。

これから、棚田地域の基盤整備に突入しそうな

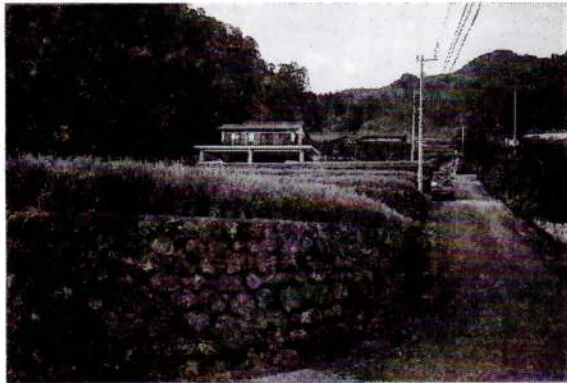
予感がする山形から、とりとめのない話題提供でした。

星野村の棚田調査・シンポジウムに参加して

国立歴史民俗博物館友の会事務局長 河合 享

「長尾に嫁るか介須（げす）の木に登るか」。苦辛の話が伝わる星野村は、鹿児島本線・羽犬塚（はいぬづか）駅から八女（やめ）市を過ぎ、東へ熊渡山を源に発した全長 28.5 km の星野川ぞいの山また山の杉と桧の緑濃い奥の深い村である。

星野村の棚田は、24 地区が調査地域に登録されている。地形環境は、各々、異なる地形基盤で景観も変化に富んでいる。土地利用は、野菜栽培に不適で、棚田は茶畑、躑躅（つつじ）、馬酔木（あしび）、ニオイバナなど緑花木などに転作されてきた。農業的土地利用は、村の総面積 81.28 平方 km のうち、杉・桧などの人工林を含む林野面積が総面積の 84%、畑地は 5.15%、水田は 3.55% に過ぎない（平成 10 年 10 月 1 日現在）。ほかには牧場など。



村中が城壁のような石垣の棚田

星野村の総世帯数は 1,129 世帯、総人口は 3,881 人、人口減少が顕著な地域である（平成 12 年 10 月 1 日現在）。人口構成では、65 歳以上の高齢化率は、昭和 40 年の 10.2% から平成 12 年には 35.4% と上昇、若年齢層の減少が際立っている。

「民俗文化財・棚田調査」は、平成 13 年 4 月 1 日から平成 16 年 3 月 31 日まで行われるが、今回は「中間報告、星野村の棚田はすごい！」というミニシンポジウムが開催された。

高木清一郎星野村教育長のあいさつ、椋谷小学校 5 年生の棚田紙芝居「棚田かいこんび」の発表ではじまる。報告は、春山成子先生、OHP を使い地形からの「全体の概況調査報告」、加藤仁美先生「水利の概況調査・棚田の水利用について」、飯沼賢司先生「棚田の歴史調査・調査の中で冷たい水を温かい水に水路構造に注目」、服部英雄先生「人々の暮らしと棚田の歴史・しこ名（地名）からの聞き取り調査・耕作発願碑の新解釈」、段

上達雄先生「棚田の石垣調査・牛と馬の話」、会場から、駄田井正先生「グリーンツーリズムと伝統技術の保存について」、石井里津子先生「つらい介須の地に、どうして嫁いだの？の質問に“夫がよか人じゃけのう”と聞き取り調査の裏話など報告」。

まとめの、大島暁雄先生の「棚田の価値について」では、「棚田は景観など都会人の無い物ねだりになっていないか？ 各先生方の調査報告も大切だが、あくまでもお手伝いであって、地域の人々が自分のものとしてはじめて棚田の価値が認められるのではないか」。ゲストの皆さんをはじめ、広内、上原地区棚田保存実行委員会、星野村の人々など多数が参加、司会は教育次長の栗秋恵二氏がつとめ盛会に終わりました。

棚田調査は、8 月 18 日から 25 日まで 9 班で実施された。服部先生の歴史調査に同行。「まず、しこ名からお聞きしたいのですが……」で始まる調査は、地元ならではの話で貴重な体験。ぜひ会員の皆様にもお手伝いに参加をお勧めします。違った棚田の楽しみ方が味わえるのではないかと思います。詳しい調査報告と平成 16 年 3 月の結果報告を楽しみにしています。



聞き取り調査をする服部先生(写真中央)

グローバルゼーション（国際化）ばかり目立つ中で、棚田調査はローカリゼーションを考える、地方からの伝統文化・芸術など“日本社会のあり方”ひいては個人の自立・創造性・自分の生き方を模索する場と感じた。若者に魅力ある棚田とは？ 何であろうか。星野村で出会った老婦人の話が心に残った。昨日のように語る楽しそうな姿は、明日の棚田を見る思いがした。

※介須（げす）＝枸橘（かろたち）。とげのあるミカン科の木

— 日本の棚田百選紹介 —

“畦に咲く真っ赤な彼岸花が美しい” 檜原の棚田

上勝町棚田を考える会 谷崎 勝祥

徳島県上勝町は、四国山地の東端に位置し、紀伊水道に向かって54kmあまり東流する勝浦川の源流地域で、109平方kmあまりの山間地域です。

1,439mの高丸山を最高に南西北の三方を1,000mクラスの急峻な山に囲まれ、人家や耕地は100mから700mの山腹に張り付く様に散在しています。町内の水田はすべて棚田ですが、檜原集落のほかにも5か所ほどまとまった棚田があります。檜原の棚田は、上勝町のほぼ中央部、標高500mから700mに4アールくらいの大きさから畳3枚くらいのもので約500枚5ヘクタールがあります。傾斜は10分の1くらいの緩やかなところから、急なところは幅1mの田のために5mもの高さの石積のところもあります。土羽(どは)の部分も一部ありますが、ほとんどが小さな石積です。

戸数16戸人口37名の檜原集落は、近隣の集落へは杉林の道を1kmあまり通らなければ行けない隔絶した集落で、農家はほとんど兼業農家、高齢化率は50.1%です。

地元農家を中心に「上勝町棚田を考える会」を96年に結成し、棚田の撮影会やフォトコンテストな

どを2回ほど行いました。その後、年を追うごとにカメラマンの数は増え続けています。

5月ごろの水を張った棚田も美しいが、秋、9月中旬、稲の黄金色に実った棚田の畦に真っ赤に咲き競う彼岸花は実に美しい。かつて畦畔の草が農耕用の牛の冬場の飼料として、夏場に刈り取られ干し草としていたころには、彼岸花が畦畔にあると萱草がはえず邪魔物扱いされていたが、農家自身が棚田を見直しはじめた頃から「彼岸花の咲いた棚田は美しい」と球根を植えはじめ、最近では花の数が一段と増えてきました。

97年、地元新聞社地方部の女性記者が「棚田の耕作をしたい」と水田を借りたのが始まりで、毎年テレビ局の人たちが水田を借りており、それ以外にも作業体験希望の会社員や大学生が棚田に来て体験を積んでおります。

水田を拓く時に掘り出した大小さまざまな石で積まれた石積は、秋の台風が来るたびにどこかは崩れます。しかも棚田の底には蛇紋岩層があり、時には大きな崩壊となることもあります。小さな崩れは補助事業のコンクリートブロックで直すのではなく、自分で石を積んで直す仲間が増えています。70歳を超えられた元気な仲間です。

「考える会」のメンバーがつくった水車小屋の壁面には工学部の学生さんが作ってくれた棚田掲示板の内容は、随時、私たちで入れ替えています。訪問者が「ヤマカガシって毒蛇？」と写真を見ながら私たちに質問がきます。

県内外からの棚田視察者も説明予約組で年100名以上、行政や第三セクターの案内もあり多くの方が来られます。水車小屋も壁の小さなノートには、秋田や東京、名古屋、大阪、愛媛など県外の方々へ交じって、それぞれの棚田へのメッセージが見られます。



急峻な山々に囲まれた檜原の棚田

[事務局からのお知らせ]

兵庫県加美町の棚田現地見学会・研究会のお知らせ

今回は、たいへん欲張りな企画になってしまいました。
棚田を見学する上に、日本一高貴な中世和紙として知られた杉原紙(すいばらがみ)の里の探訪があり、さらに、棚田でとれた蕎麦と播州地鶏ごはんの昼食が待っています。
こんな贅沢は室町幕府の御台所日野富子もできませんでした。
ふるってご参加下さい。

とき 平成14年12月7日(土)～8日(日)

ところ 兵庫県加美町

(詳しくは別紙参照)

スケジュール(予定)

12/7(土・1日目)加美町岩座神(いさりがみ)他の棚田見学→研究会(発表:津川神戸大学教授他)→交流会

12/8(日・2日目)棚田現地見学(轟・西山・岩座神地区)→杉原紙の里探訪→意見交換→蕎麦と播州地鶏の昼食

[会務報告]

平成14年度棚田学会総会は、8月4日(日)に三越劇場にて開催され、平成14年度の活動計画及び予算案を、理事会提案どおり可決いたしました。

平成14年度活動計画

1. 棚田学会大会(平成14年度大会:平成14年8月4日開催).....1回
2. 理事会(平成14年7月13日、8月4日開催).....7回
3. 研究会・談話会・見学会.....5回
4. 棚田学会誌『日本の原風景・棚田』(第4号)(棚田学会誌第3号:平成14年7月25日発行)…1回
5. 棚田学会通信(第8,9,10号).....3回

平成14年度予算

(平成14年7月1日～平成15年6月30日)

収 入 の 部		支 出 の 部	
事 項	予算額	事 項	予算額
会費収入	1,920,000	旅費	200,000
普通会員400名×4,000円	1,600,000	講師旅費(研究会等)	100,000
学生会員10名×2,000円	20,000	連絡旅費(現地見学会等)	100,000
賛助会員30名×10,000円	300,000	謝金	160,000
図書販売	100,000	編集謝金	60,000
前年度繰越金	1,868,480	アルバイト謝金	100,000
		印刷費	1,350,000
		会誌第3号(B5、106頁)	1,100,000
		学会通信40,000円×3回	150,000
		大会資料等	100,000
		通信・郵送費	700,000
		会誌発送費(第3号)	160,000
		学会通信発送費(8・9・10号)	250,000
		郵送費	40,000
		通信費(電話、FAX、切手等)	250,000
		ホームページ運行費	100,485
		初期設定費用	24,885
		運用費用	75,600
		会議費	200,000
		理事会・編集会議他	200,000
		大会会場設営費	100,000
		消耗品費	77,995
		予備費(会誌第4号印刷費)	1,000,000
合 計	3,888,480		3,888,480

編集後記

棚田学会も創立して4年目となりました。先月山形県最上郡へ出張の折、大蔵村の棚田地域へ足を延ばしました。地滑り地帯なのでここの暮らしは命がけです。そこに小さな地滑り会館があり、訪問台帳に棚田学会員Tさんご夫妻の名前を見つけ「九州からいらしたんだ～」と熱心さに心を打たれました。

今年の棚田現地見学は兵庫県加美町からスタートです。皆さんの参加をお待ちしています。 編集部